

紹介

近年のアイヌ口承文芸テキストと口承文芸研究

—金田一・久保寺・知里以後—

奥田 統己

アイヌ口承文芸を考える上では、金田一京助、久保寺逸彦、知里真志保の三名の業績は現在もなお中心的な位置を占めていると言つてよく、他の分野の研究者からも、彼らの著作はまず第一に参照されるだろう。しかしいっぽうで、彼らの後に発表されたテキストや研究・考察などもかなりな数になつており、その中からはいくつかの注目すべき流れも生れてきている。ここではそうした点を中心に、金田一・久保寺・知里以後のアイヌ口承文芸テキストと口承文芸研究について、簡単に紹介したい。

一、まず第一に注目されるのは、アイヌ民族がみずから書いた、あるいはみずから読むことを目的にうたったテキストが、活版に刊行されていることである。その中に

は、口承文芸の語り手自身の記録によるものも数多く含まれている。

- ① 葛野辰次郎（一九七八）『キムスポ』。（一九七九）『キムスポⅡ』。（一九八三）『キムスポⅢ』。（一九八七）『キムスポⅣ』、私家版。
- ② —（一九八三）『神の語り神互いに話し合う』、オホーツク文化資料館。
- ③ 葛野辰次郎、藤村久和（解題）（一九八二—一九八九）『神々への祈り（第一—六回）』、『アイヌ文化』七一—四。

葛野翁は、アイヌ文化が「活保存」されること、つまりアイヌの若い人たちがみずからよつて後世に伝承されることを願ひ、そのためにと、数多くの口承文芸などを筆録し、公刊している。翁によれば、文献に記録し、博物館に展示するだけでは文化の

「死保存」にすぎないのである。①は希望すればテープを頒布してくれるということである。

- ④ 鍋沢元蔵（発行年不明）『アイヌの祈道全集』。『沙流川筋の祈禱集』。
- ⑤ 鍋沢元蔵、扇谷昌康（一九六五）『ウエペケル menoko esimukep（女の下帯）』、『北海道の文化』九。（一九六七）『雷神の自ら歌つた神謡』、『同』13。
- ⑥ 門別町郷土史研究会（一九六五）『アイヌ叙事詩クトネシリカ（お化けの憑物、魔物の憑物）』（門別町文化財調査シリーズ第一）。（一九六六）

- ⑦ [NONNO ITAKA アイヌの祈詞]（同第三）。（一九六九）『アイヌの叙事詩』（同第四）。

鍋沢翁は葛野翁より一世代前の語り手であるが、おなじく多くの口承文芸を筆録し、その一部を公刊している。未公刊分を含めて翁のノートのマイケロフィルムが北海道立図書館に収蔵されている。⑥は翁のノートに手を加えて出版されたものである。④⑤参照。なお『北海道の文化』は北海道文化財保護協会の機関誌で、他にもアイヌ口承

文芸の関係記事が多数掲載されている。

ほかに語り手自身の記録によるものとしては、以下⑦―⑩があげられる。④⑤、④⑥参照。

⑦砂沢クラ（一九八三）『私の一代の思い出 クスクップオルシベ』、みやま書房。

⑧貫塩喜蔵（一九七八）『アイヌ叙事詩 サコロベ SAKOROPE』、白糠町。

⑨山本多助（一九七四）『阿寒国立公園とアイヌの話』、ヤイユウカラ民族学会。

⑩——（一九七八）『怪鳥フリー』、平凡社。

⑪アジヤ・アフリカ言語研究室『アイヌ モシリ』。

⑫はテープが付録になっている。⑬は一九五〇年代から六〇年代にかけて発行されたと思われる小冊子形式の雑誌。筆者が見ている番号には、鍋沢翁、山本翁によるテキストが掲載されている。詳しいことをご存じのかたはご指示ください。

⑬萱野 茂（一九七四）『ウエベケレ集 大成 第一巻』、アルドオ。

⑬——（一九七五）『アイヌの民話集Ⅰ』、北都出版。

⑭——（一九七五）『おれの二風谷』（一九七七）『炎の馬』、すずさわ書店。

⑮——（一九七九）『ひとつぶのサッチポロ』、平凡社。

⑯——（一九八八）『カムイユカラと昔話』、小学館。

著者についてはいまさら解説を要しないと思われる。⑫は「アイヌが読むため」をうたうと同時に、散文の物語の原文対訳を中心にした初めての書物であって、録音テープが付属していることと合せて、画期的な内容といえる。⑯は散文の物語と神話とが収められており、神話はすべて原文対訳になっている。また冒頭にはアイヌ口承文芸についての著者の最近の考えがまとめられている。希望者にはテープを頒布してくれるということである。

⑰アイヌ無形文化伝承保存会（一九八八）『神々の物語』（一九八二）『英雄の物語』（一九八三）『人々の物語』（一九八三）『アイヌの民話Ⅰ』（一九八四）『アイヌ生活誌』（一九八五）

『アイヌの民話Ⅱ』（一九八六）『語りの中の生活誌』。

⑱——（一九七六―一九八九）『アイヌ文化』一―四。

アイヌ無形文化伝承保存会は、民族文化の伝承・保存を目的としてさまざまな事業を行っている団体である。⑰のシリーズは⑳の事業で集められたテープの整理・公刊を目的としており、個々の物語の注や付録として、重要な論考も収められている。㉓参照。また「保存会」は機関誌として『アイヌ文化』を毎年発行しており、そこには⑳をはじめ口承文芸に関する重要な記事が多く掲載される。

⑲金丸継夫（一九六〇―一九六七）『アイヌの伝承（一―一六）』、『北海道地方史研究』三七―六五。

⑳川上勇治（一九七六）『サルウシクル物語』、すずさわ書店。

㉑杉村キナラブック、大塚一美、三好文夫、杉村京子（一九六六）『キナラブック・ユーカーラ集』、（旭川叢書 第三巻）。（ソノシートつき）

㉒杉村キナラブック 杉村京子（訳）

(一九七七一—一九八五)「キナラブブック・ユーカラシリーズ ①―⑤」、『アイヌ文化』、三—一〇。いずれもアイヌの比較的若い世代の手による口承文芸や伝承の記録である。

⑳ ポン・フチ(一九七六、一九八七年改訂)『アイヌ語は生きている』。(一九七八、一九八七年改訂)『ユーカラは甦える』。(一九八〇)『ウレシバモシリへの道』、新泉社。

多くの語学的に信頼できるテキストが収められており、著者の主張への賛否を問わず無視できない文献である。

二、注目される動きの第二は、さまざまな地域の口承文芸が発表され、研究されるようになってきたことである。金田一らがとりあげた地域は主として沙流(門別・平取)胆振(幌別)および樺太であったが、最近では、釧路・帯広などの道東や旭川、また日高地方東部(静内ほか)などのものも多く発表されている。前にあげたうちでも①―③、⑬、⑲、⑳ は静内、㉑、㉒ は旭川、⑳―㉑ は釧路地方の語り手によるものであ

り、㉑にも各地の口承文芸が収録されている。

㉒ 浅井 亨(編)(一九七二)『アイヌの昔話』、(日本の昔話二)、日本放送出版協会。

㉓ ― (一九七九)『日本の民話 北海道』、(日本の民話二)、ぎょうせい。
道東や旭川の語りを収めている。いずれも巻末に原文対訳が例示されている。

㉔ 市立旭川郷土博物館(一九八三)「太田コウンテカン オイナ・トゥイタック集」、『市立旭川郷土博物館研究報告』、一四。

旭川の語り手の神謡などの原文対訳である。

㉕ 藤村久和(一九八六—一九八七)『神々の物語』(二—九)、『北海学園大学学術論集』、五四—五八。

釧路地方の四宅ヤエ唄の神謡の対訳。アイヌ口承文芸の研究上見逃せない論考がそれぞれに付されている。

㉖ 古川(村崎)恭子(一九七二)「樺太アイヌ語テキスト ― タライカ方言民話―」、『金田一博士米寿記念論集』、

三省堂。

㉗ 村崎恭子(一九七六)『カラフトアイヌ語』、国書刊行会。

㉘ ― (一九八九)「樺太アイヌ語口承資料二」、(昭和六三年度科学研究費補助金研究成果報告書)。

㉙ はテープが付録になっており、㉚ も希望すればテープが頒布されることである。

㉛ 北海道教育委員会(一九七六—一九八一)『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書(無形民俗文化財一—六)』。

㉜ ― (一九八二—一九八九)『アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査I—VIII』。

㉝ ― (一九八八)『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズI アイヌ民話』。(一九八九)『同II アイヌのくらしと言葉I』。

㉞ は各地で行われた、民族文化についての聞き取り調査のテープ目録。口承文芸の梗概が示されているものもある。㉟も各地の民俗調査だが、信頼できて地域的にも貴重なテキストが収録されている。㊱は㉟を

引き継いで③①のテープの整理を行っている。

③④更科源蔵（一九八一—一九八四）『更科源蔵著作集 I—X』、みやま書房。全道各地を対象としたこれまでの著作をまとめたもの。

三、また、レコードやテープなど、実際の音声が付録、あるいは希望者に頒布という形で提供されるものも多くなっている。これまで紹介した①、⑧、⑫、⑯、⑳、

㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、

③⑤早稲田大学語学教育研究所（一九八四—一九八八）『アイヌ語音声資料一—五』（一九八七）『アイヌ語音声資料一—二』索引。

アイヌ語の研究者である田村すず子による。全巻にテープ（別売）が提供され、音声つきのテキストとしてはもともとまとめたもの一つである。また第四巻の冒頭にはアイヌの歌謡の詞句に言語学的な考察を加えた重要な論考が収められている。

③⑥日本放送協会（一九六五）『アイヌ伝統音楽』（一九六七）『アイヌの音楽』。③⑦西角井正大（一九八七）『アイヌの英

雄詞曲《ユーカラ》』（テープ付）、『日本の音 声の音楽一』、音楽の友社。

③⑧は踊り歌などの歌謡を中心に、北海道全域で行った調査の記録（ソノシート四枚つき）と、その際の録音の一部をLP一〇枚（非売品）に収めたものである。③⑦にはユーカラが数分間収録されているが、本文の解説は再検討の余地がある。

③⑧『アイヌの歌』、SKM 39、キングレコード。

③⑨『神々への祈り—風谷アイヌの詩とユーカラ』、SKM 182、キングレコード。

④⑩『熊送り—神と二風谷アイヌの語り』、KHA(H) 1012、キングレコード。

④⑪『日本の民俗音楽—別巻—アイヌ・オロッコ・ギリヤークの芸能』、SIL 2202-4-N、ピクチャー。

いずれもLPレコードで、③⑧は白老と銅路、④⑪は各地の口承文芸や歌謡を収録している。③⑧はさまざまなタイトルで再発売されている。

上にあげたものも含め、アイヌ口承文芸の音楽面に注目した調査・研究も行われて

いる。

④⑫近藤鏡二郎（一九六二）『アイヌのユーカラ—沙流地方の伝承』、音楽の友社。

④⑬門別町郷土史研究会（一九六六）『沙流アイヌの歌謡—録音資料目録とその解説—』（門別町文化財調査シリーズ第二）。

④⑭は鍋沢翁などによる語りの音楽面についての、先駆的な考察である。著者による録音テープは北海道立図書館などに収められており、④⑮はその目録である。

④⑯北海道アイヌ古式舞踊連合保存会（一九八七）『北海道アイヌ古式舞踊・唄の記録』。各地で現在行われている踊り歌などを多数採譜している。

四、さらに、過去の未発表の資料や古文獻の公刊・復刻、それについての報告もさまざまな形で進められている。

④⑰北海道教育委員会（一九七九—一九八九）『アイヌ民俗文化財ユーカラシリ—ズ—』。

④⑱——（一九八二—一九八六）『アイヌ

民俗文化財口承文芸シリーズⅠ～Ⅴ
知里幸恵ノート(一～五)。(一九八
七～一九八九)『同Ⅵ～Ⅷ 久保寺逸
彦ノート』(一～三)。

④5は金田一による『ユーカラ集』のあと
をうけて、金成まつのノートを整理・公刊
しているシリーズである。④6は知里幸恵と
久保寺の未発表のノートの整理・公刊事業
である。いずれも原ノートのマイクログリ
フムが道立図書館に収蔵されている。また
金成ノートをめぐっては、蓮池悦子による
書誌を含めた考察が『アイヌ文化』や『北
海道文化』に発表されている。

④7 Pilsudski, B. (1912, rep. 1989) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore, Collected Works of Bronislaw Pilsudski*, vol. 2, Mouton de Gruyter, Berlin.

④8——(1984) *Ainu Prayer Texts, I-IV, Working Papers 10-13, Institute of Linguistics, Adam Mickiewicz University, Poznan Poland.*

④9 北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会(一九八三～八九)、「樺太アイヌの

言語と民話についての研究資料(一
三三)」「創造の世界」四六一～七二。

⑤0 *Proceedings of the International Symposium on B. Pilsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, (1985), Sapporo.

⑤1 国立民族学博物館(一九八七)『ユ
スツキ資料と北方諸民族文化の研究』、
『国立民族学博物館研究報告別冊』五。

④7は樺太アイヌの口承文芸についての著
名な文献のリプリントで、④8は著者の未公
刊のノートの写真版と翻刻、④9は④7の原文
をカタカナにしておして対訳したものである。
⑤0、⑤1はいわゆるピウスツキ蠟管をめぐ
る報告書で、さまざまな論考を収録している。

⑤2 NEVSKIJ, N. A. (1972) *Ajnskiy Folklor*, Moskva.

第一次大戦のころ来道したロシアの民族
学者によるテキストの原文対訳で、著者の
死後30年近くして出版された。

⑤3 上原熊次郎(一九七二、一九七二復
刻)『もしほ草』、国書刊行会。

⑤4 能登屋円吉(一八六八、一九七二復刻)
『番人円吉蝦夷記』、国書刊行会。

⑤5 浅井 亨(一九七二)「加賀屋文書
中のチャコルベ」、『北方文化研究』六。
⑤6 田中聖子(一九八九)『義経言葉』の
「義経浄留理」について——近世のア
イヌ口承文芸の記録に関する一考察
——、『早稲田大学語学教育研究所紀
要』三三八。

⑤3、⑤4は江戸時代の単語集だが、それぞ
れ巻末に口承文芸のテキストが例示されて
いる。

五、以上、テキストに関する全体的な傾
向としては、ウエペケレ、トゥイタクなど
と呼ばれる散文の物語への比重が増大して
いることが注目される。知里真志保の『ア
イヌ民譚集』に収められているのは「パナ
ンペ・ペナンペ」というやや特殊なジャン
ルであって、本格的な散文の物語のテキス
ト、特に原文対訳が盛んに発表されるよう
になるのは近年のことである。上にあげた
なかではまず⑤12、⑤16、⑤17、⑤21、⑤25、⑤26、
⑤28、⑤30、⑤33、⑤35、⑤46、⑤48に⑤13、⑤15、⑤19、⑤22、
⑤24、⑤32、⑤34、⑤47、⑤49、⑤52などに散文の物語
の対訳や翻訳が収められている。

いっぽうで、訳は語り手本人に確認するなどしておおむね正確であっても、アイヌ語の聞き取りや表記に問題のあるもの(21)、(22)、(26)、(36)も見受けられる。なお、道内の各市町村史にも、伝説や物語などを収録しているものが多い。

六、アイヌ口承文芸の研究全般については、金田一らによって立てられた枠組みを、新しい観点やデータに基づいて部分的に修正・発展させるような考察が行われている。また、これまで述べたように、テキストに注や解説という形で重要な論考が付されていることも多い。

⑤7 PHILIPPI, D. L. (1979) *Songs of Gods, Songs of Humans, The Epic Tradition of the Ainu*, University of Tokyo Press.
冒頭で、A. B. Lordの理論を取り入れた注目すべき分析や、アイヌ口承文芸の成立に関する歴史的な考察を行っている。本文のテキストは久保寺の『神謡・聖伝の研究』に基づいている。

⑤8 萩中美枝(一九八〇)『アイヌの文学 ユーカラへの招待』、北海道出版企画

センター。

⑤9 札幌テレビ放送(一九七八)『サコロベの世界』。

⑤8は道東などでのデータをもとに、金田一らの枠組みの修正を試みている。⑤9も主に萩中によるもので、釧路の八重九郎翁をはじめさまざまな地域の語りが収められている。

⑥0 中川 裕(一九八七)「アイヌ語の人称接辞」、『国文学解釈と鑑賞』一九八七／二。(一九八七)「アイヌ語研究とフオークロア。―アイヌ口承文芸の文体―」、『同』一九八七／七。

⑥1 ―(一九八九)「口承文芸に見るアイヌ人と和人との関係」、『民族接触』、六興出版。

⑥0はそれぞれアイヌ口承文芸におけるいわゆる「一人称叙述」と「雅語と日常語」の問題について、言語学的な見地から金田一らの説を再検討している。

⑥2 藤村久和(一九八〇)「神語り」(『昔語り』)への新しい視座 アイヌ、『国文学解釈と鑑賞』四五／一二。

⑥3 大修館書店言語編集部(一九八五)

『言語』一四／二三、(特集アイヌの言葉と文化言語篇・文化篇)。

七、ところで歴史学、考古学、民族学などの側からも、アイヌ口承文芸についてさまざまな考察が行われているが、必ずしも以上のような新しい動きを十分に反映しているとは言えないようである。特に五で指摘した散文の物語は、口承文芸を通してアイヌの歴史や民俗について考える上で、具体性、信頼性から見て、これまでより以上に考察の対象にされなければならないジャンルであろう。

⑥4 榎森 進(一九八二)『北海道近世史の研究』(北方歴史文化叢書、北海道出版企画センター)。

⑥5 ―(一九八七)『アイヌの歴史 北海道の人びと』(二)『日本民衆の歴史 地域編』⑧、三省堂。

⑥6 海保嶺夫(一九七四)『日本北方史の論理』、雄山閣。

⑥7 伊藤雅樹(一九八六)「古代蝦夷の社会―交易と社会組織」、『歴史評論』四三四。

それぞれユーカラ成立の歴史的背景について論じたのだが、⑥4は第一章「ユーカラの歴史的背景に関する一考察」のなかで、既発表のユーカラを資料とした綿密な考察を行っている。特に「Kutumésika」の三篇の異伝を対照した考察は口承文芸学的にも注目される。

⑥8宇田川洋（一九八二）『アイヌ伝承と砦』、北海道出版企画センター。

⑥9大林太良（一九八八）「アイヌのユーカラとその歴史的背景―日本・シベリア」、『口頭伝承の比較研究「四」』、弘文堂。

⑦0荻原真子（一九八四）「巫謡」およびシャーマンの伝承について、『国際商科大学紀要 教養学部編』三〇。

⑦1関 敬吾（一九八二）「解説」、知里真志保『アイヌ民謡集』岩波文庫版。

⑦2三浦佑之（一九八五）「語りの文学」、『国文学解釈と観賞』別冊。

八、なお、アイヌ口承文芸のジャンル別・テーマ別に主な文献をまとめた目録としては⑦3、語り手別に発表された記事を網羅

したものとしては⑦4を参照されたい。⑦5はアイヌ全般に関する包括的な目録である。またアイヌ文化についての手軽な入門書としては⑦6をあげておく。

⑦3小柳誠之（一九八六）「物語に関する索引抄」、『語りの中の生活誌』、アイヌ無形文化伝承保存会。

⑦4『エカシとフチ』編集委員会（一九八三）『文献上のエカシとフチ』（「エカシとフチ」資料編）、札幌テレビ放送。

⑦5松下亘、君尹彦（一九七八）『アイヌ文献目録―和文編―』、みやま書房。

⑦6アイヌ民族博物館（一九八七）『アイヌ文化の基礎知識』。

なおその後、⑦7、⑦8が出版された。いずれも画期的な力作である。⑦8の冒頭には、『神謡集』のアイヌ語について、韻律論的な考察を含む文法がまとめられている。

⑦7稲田浩二、小沢俊夫、浅井亭、松原光法他（一九八九）『日本昔話通観 第一巻 北海道（アイヌ民族）』、同朋社。

⑦8切替英雄（一九八九）『アイヌ神謡集』辞典 テキスト・文法解説つき』

（北大言語学研究报告、一〇）。

ここ数年、アイヌの民族的アイデンティティの確立と民族文化の伝承への動きは飛躍的な高まりを見せている。その中で本稿が、単なる理論構築や比較研究の材料を提供するだけではなく、アイヌ口承文芸、そしてアイヌ語・アイヌ文化そのものに親しむ一助となれば幸いである。

（おくだ・おさみ／千葉大学研究生）